

がん教育推進自治体視察レポート

がん教育に関する研修会（兵庫県教育委員会）

1. 概要

研修会名	令和7年度がん教育に関する研修会
場所	兵庫県看護協会 ハーモニーホール
日時	令和7年12月17日（水）13:00～16:30
参加者	各教育事務所担当者、各市町組合教育委員会担当者 小・中・高等学校・特別支援学校教職員 外部講師によるがん教育に関心のある方（学校医やがん経験者等）
参加人数	約130名
テーマ等	講義：「学校におけるがん教育の考え方と授業実践について」 実践発表：中学校・高等学校・特別支援学校の実践発表 講演：「がん教育における外部講師の役割と連携」 －学校との連携方法、講師としての配慮事項－
目的	研修会を開催し教職員の指導力の向上及び学校での健康教育の一層の充実を図る
講師	（講義） 新潟医療福祉大学 健康スポーツ学科 教授 杉崎 弘周 氏 （実践発表） 千種学園宍粟市立千種中学校 平田 新二 校長 兵庫県立芦屋高等学校 渡邊 とも子 保健課長 兵庫県立西神戸高等特別支援学校 大西 利恵 養護教諭 （講演） 兵庫県がんピアサポーター 大西 亜矢 氏 （挨拶） 兵庫県教育委員会事務局 体育保健課 課長 土井 一弥 （進行） 兵庫県教育委員会事務局 体育保健課 保健安全・食育班 主任指導主事兼主幹 平澤 郁子

2. 研修会等の内容（流れ）

〈研修会の進行内容〉								
12:30	13:00	13:10	14:40	14:50	15:50	16:00	16:20	16:30
受付	開会	講義 (90分)	休憩	実践発表 (60分)	休憩	講演 (20分)	閉会	

<講演内容や事例発表内容>

(1) 開会、あいさつ

兵庫県教育委員会事務局体育保健課 課長 土井 一弥 氏

がんは子供たちにとっても身近なテーマになっており、正しい知識を伝えることは、命の大切さを学び健康を守る力を育てる上で重要である。学校現場でどのように工夫して教えるのか、教員に求められる役割は大きくなっている。



県教育委員会では、外部講師を活用したがん教育等現代的な健康課題理解増進事業として、様々な取組を推進している。

外部講師派遣事業では、県立学校 11 校へ医師やがん専門認定看護師、がん経験者を派遣し、講演会等の授業を実施した。外部講師の活用は、専門的な知識と最新情報の提供、教科書だけでは得られない生きた学びを提供し、命の大切さや健康習慣の重要性を実感させる上で貴重な機会であり、生徒の理解を深めるだけでなく、学校全体の健康教育の質を高めるために重要な手段と考える。まだ外部講師を活用していない学校は前向きな検討の上、がん教育を各学校や地域の実情に応じて推進していただきたい。



(2) 講義

「学校におけるがん教育の考え方と授業実践について」

新潟医療福祉大学健康スポーツ学科 教授 杉崎 弘周 氏

・学校におけるがん教育とは

教科等におけるがん教育：児童生徒が対象、教科等の教員が主体者となり、授業として行う。

学校におけるがん教育：児童生徒が対象、全教職員が主体者となり、学校全体の取組として行う。

・教科等におけるがん教育で考えられる教科について

児童生徒の自立（生涯を通じた健康的な生活）の土台としての教科での学習とそれ以外（個別指導・健康相談など）を絡めることが大切。また、小・中・高での系統的な指導が重要となるため、がん教育でも意識してほしい。

小学校／中学校：小学校体育（保健領域）／中学校保健体育科（保健分野）・道徳・特別活動・総合的な学習の時間

高等学校：保健体育・総合的な探究の時間・特別活動

・国内のがん教育に関する動き

2014 年度、学校におけるがん教育の在り方と目標が提示された。1つ目は、がんについて正しく理解することができるようにすること。2つ目は、健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにすること。特に2つ目の目標は道徳や特別活動が絡んでくる。

・小学校・中学校・高等学校における、学習指導要領解説

・小学校：喫煙はがんや心臓病などの病気にかかりやすくなるなど、人体に影響があることに触れる。実際、昭和 40 年から平成 30 年の喫煙率を比較すると、右肩下がりに喫煙率は低下している。喫煙可能な場所の制限を始めとした社会動向もあるが、保健授業も寄与したと考えられる。がん予防についても、保健授業やがん教育が寄与することが期待できる。

- ・ 中学校：がんの正しい知識について理解し、疾病の回復についても触れるようにする。
- ・ 高等学校：がんを予防するためには調和のとれた健康的な生活を続け、生活習慣病のリスクを軽減することが必要であること、健康診断やがん検診などの受診が必要であることを理解する。また、がんの種類、原因、治療法と、がん患者の生活の質や緩和ケアが重要であることに触れ、社会的な対策が必要であることを理解する。
 - └ 小・中・高等学校の系統性を理解して、指導する必要がある。

・保護者はがん教育についてどう思っているのか

学校でがん教育が行われることについて、小・中・高等学校の保護者に調査を行ったところ、賛成 72.7%、反対は 1%であった。多くの保護者の方は賛成している。

・児童生徒のがんに対する意識について

がんについての印象を小・中・高等学校の児童生徒へ調査したところ、8割以上が怖いという印象をもっていると回答した。「理由はないがなんとなく怖い」、「不治の病だから怖い」といった認識をもっている児童生徒もいる。正しく内容を理解させることが大切である。

・がん罹患の要因のひとつとしてのウイルス

B 型または C 型肝炎ウイルスが要因の肝臓がん、HPV(ヒトパピローマウイルス)が要因の子宮頸がん等、感染性が要因でがんになるケースは、男性 22.8%、女性 17.5%となっている。しかし、がんの要因は様々であり、原因不明であることも多い。

・小学校・中学校・高等学校での授業例

- 小学校：クラゲチャートを用いて、どんな生活をするのがんになると思うかを書き出す。
- 中学校：ベン図を用いて、がん予防のために今すぐ取り組むことと将来取り組むことで共通することを書き出す。
- 高等学校：ワークシートを用いて、20 個の項目から「がんを防ぐための新 12 か条」を選択する。
- └ 児童生徒が関心を示し、教育内容を理解できるよう、教師は教材の工夫をしてほしい。

・特色のある高校（総合学科）での授業実践事例

保健の授業において、生徒の年齢に近いがん経験者のメッセージ動画を視聴した。後日の特別活動の時間に、メッセージ動画に出演した外部講師(がん経験者)に来てもらうことを生徒に伝えると、外部講師への様々な質問が生徒から寄せられた。授業当日は、外部講師による講演の後、外部講師と生徒の対話形式で質疑応答が行われた。

講演後には、「実際にがんになった人のお話しは言葉の重みが違った」「がんになった人に対する考え方が変わった。他人事ではないと改めて思った」「たばこや酒などががんの原因になると思っていたが、それだけではないことを知って勉強になった」などの感想があがった。

・外部講師による指導での注意点

- ・ 科学的根拠に基づかない情報や誤解を与える情報を取り扱うことは不適切であるため、事前打合せで十分に確認する。
- ・ 短い時間で児童生徒にメッセージを伝えるため、肯定的なメッセージとなるよう構成を配慮する。

・がん教育実践のためのプラン（演習：がん教育のプランをイメージする）

実施教科、授業の事前準備から当日の実施・サポート体制、依頼する外部講師の選定などについて、勤務校で実施する場合や自身が授業に参画する場合を想定し、参加者に具体的にイメージしてもらう演習を実施。例えば高等学校の場合、保健授業担当者は授業、養護教諭は運営協力や資料提供・サポート、学年部教諭は特別活動や道徳、総合的な学習（探究）の時間等での関連指導といった役割分担が考えられることを紹介。参加者が各自5分程度検討したのち、実際に高等学校で取り組んだ事例を紹介した。

└ 授業事例紹介①：保健担当教諭ががんの基礎知識の授業を実施、がん経験者が短時間の講話、生徒からがん経験者へ質疑応答という流れだが、質疑応答の間は生徒が進行を務める等、主体的・対話的な学びへの工夫がされていた。

└ 授業事例紹介②：総合的な学習（探究）の時間で「がんについて」をテーマに進めていたが、より学びを深めるため、テーマを「がん教育のためのがん教育」へ変更し、メンターである大学教員とのオンラインでのやり取り等、学びを深める工夫がされていた。

（3）実践発表

『宍粟市立千種中学校・宍粟市立千種小学校における「がん教育」の取組』

千種学園宍粟市立千種中学校 平田 新二 校長

・千種町の取組について

当校は令和4年度に併設型小中一貫校として改編され、千種小学校と連携した教育を行っている。また、ちくさ杉の子こども園・千種小学校・千種中学校・兵庫県立千種高等学校の連携を柱とした一貫教育を推進するため、「園小中高連携一貫教育推進委員会」を設置し、18年間を見通した教育実践に取り組み、地域総がかりの教育を推進している。



・がん教育取組内容

がん教育を体系的に進めるため、以下の3点を柱として取組を行った。

1. 年間計画の作成
2. がんに関する授業
3. がんに関する講演会

教科横断的な視点で2つの目標を策定し、年間計画に沿ってがん教育を実施している。

<目標1 がんについて正しく理解することができるようにする>

保健領域・保健分野を中心に、各教科の授業を通して取り組んでいる。理科や家庭科では、命の大切さや身体の仕組み、がんを含む疾病、健康的な生活について扱う単元があり、健康課題や知識面からのアプローチが可能であると考えられる。

特に家庭科では、食生活と健康とのつながりに着目した取組を行っている。中学校では全校生徒を対象に、「体を健康にする料理を考えよう」をテーマに栄養バランスを考えた食材選択を条件とし、生徒が食生活と健康との関係を意識的に考える夏休みの課題に取り組んだ。

<目標2 健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする>

道徳、特別活動、総合的な学習の時間を中心に取り組んでいる。中学校の道徳科では、命の尊さ、思いやり、家族愛を学ぶ場面で、がんを題材とした教材を活用し、病気や命に関わる様々な立場や状況について考える学習を行っている。

(7年生:「ふたりの子供たちへ」、8年生:「最後の年越しそば」、9年生:「誰かのために」)
また健康教育の一環として、各学年で外部講師を招いた講話を実施している。

(8年生:薬物乱用防止教室、2・5・8年生:歯科健康教室、9年生:命の授業)

いずれの取組においても、生活習慣の大切さや様々な病気についての話が盛り込まれている。

小学1年生から中学3年生までの9年間、発達段階に応じた系統的ながん教育を実施している。道徳や人権の視点から病気を抱える人への共感的理解や共生について学び、青年期につなげる学びとして位置付けられている。

・外部講師による「がん教育」講演会(中学校、全生徒対象)

大人のがんと子供のがんの違いや、小児がんで我が子を小学2年生で亡くした経験を通して知った周囲の人々との関わりや、病気を抱える人を受け入れる環境づくりの大切さについて語られた。

生徒からは「がんになったら一人で抱え込まなければいけないと思い込んでいたが、友達や家族の支えがあれば勇気をもらえ、元気になれると思った」「重い病気にかかった子供の思いを受け、元気でいられることに感謝しながら過ごしていきたい」といった感想が寄せられた。

『兵庫県立芦屋高等学校におけるがん教育の取組』

兵庫県立芦屋高等学校 渡邊 とも子 保健課長

・芦屋高等学校について

教育綱領「自治・自由・創造」のもと、単位制のメリットを生かした教育課程で、キャリア教育の充実、活発な自治会活動や部活を掲げている。



・がん教育取組内容

令和6年度より3年間、兵庫県よりモデル校として認定され、保健講話として1年次にごがん教育講演会を実施している。

(テーマ:1年次:がん教育、2年次:薬物乱用防止教育、3年次:心の健康教室)

県より指定された事前事後アンケート、がん教育講演会、外部講師を囲んでの座談会の構成で、LHR時に保健課が主導し、実施した。令和6年度は学校全体の活動となっていないという課題を残したことから令和7年度は学校全体で取り組む仕組みをつくった。

└校務運営会議、職員会議にて本年度の取組について提案、理解・協力を全職員に仰ぐ。

阪神学区の県立高等学校や近隣関係機関(保健所等)や保護者に取組の案内を行う。

自治会や生徒保健委員会の活用、座談会の開催等事前事後アンケートの工夫を行う。

└生徒の主体的な活動(講演会の案内、提示物の作成、講演会当日の座談会への参加、講演後の感想等を引用した保健便りを作成する等)を行う。

<講演会後の生徒の感想>

「最近になって身近にがんの人がおり、どう接するのが正解なのか分からなかったので、話を聞いて良かった」「今までの学校でのがん教育は、教科書やテキスト等の内容であったのに対して、今回は経験者の人の話でとても説得力があり、分かりやすかった」

<講演会当日の座談会参加者の感想>

「講演会時には聞きづらかったことが聞けて良かった。どんなふう支えてもらえれば嬉しいかどんなことが心の支えになるかを聞かせていただいた」「いつだれががん患者となるか分からないので、検診とがんについて知るという大切さを感じた」

『兵庫県立西神戸高等特別支援学校におけるがん教育の取組』

兵庫県立西神戸高等特別支援学校 大西 利恵 養護教諭

・兵庫県立西神戸高等特別支援学校におけるがん教育について

本校は、卒業後の就労に向けた職業教育を中心としたカリキュラムを展開する職業科の知的障害特別支援学校である。がん教育においては、特別支援学校として初めてモデル校に選出され、令和4年度から6年度まで3年間モデル校として実践に取り組んだ。



具体的な取組として、全生徒を対象に「がんを学ぼう」というテーマで講演会を実施した。講演会后、①生徒が講演で得た知識と自身もつ知識、②感じたことや気をつけたいこと、③がん患者に対して自分にできることをワークシートに記入した。担任の先生の進行によるグループワークで記入したことを発表し、話し合い活動を通じて自身の知識をより深め、相手に寄り添うとはどういうことかについても理解を深めることができた。

<がん教育実施までの準備>

① 共通の指導案・教材

全ての教員が実施できるように、共通の指導案とワークシートを作成した。ワークシートはアドバイザーの指導助言を受け、設問を3つに絞って作成。

② 職員研修

モデル校として、がん教育に取り組む意義について教員の理解を深め、組織的に取り組む機運の調整が不可欠と考え、教員研修を実施した。がんという病気について自分事として捉え、がん教育に積極的に取り組むきっかけになった。

③ 大学との連携

講演会当日に講師の所属する大学の教授や学生が参加し、グループワーク等と一緒に交流する機会を設けて実施した。事前事後アンケート結果やグループワークの内容を共有し、評価分析を行い、学生の卒業研究や学校発表としても活用した。

④ 講師・アドバイザー依頼

3年間のがん教育を実施する上で、中高生向けのがん教育を実践している方を外部講師に迎え、講演会や授業計画、教材作成など様々な形で支援をいただいた。実際に来校してもらい、打合せや授業見学を通して生徒理解を深めてもらった。また、各年度で異なる外部講師を招き、講演会および授業を実施した。

<3年間の成果と課題>

【成果】

- ・学校をあげて特別支援学校の生徒に効果的ながん教育に取り組むことができた。
- ・がん教育を入り口にいのちの授業へと応用する準備ができた。

- ・今後の継続に向けての挑戦ができた。
 - ↳ がん教育を基にしたいのちの授業として、今後も発展・継続させたい。

【課題】

- ・教育課程への位置づけ→いのちの授業として教科の年間授業計画への組み込み
- ・全ての授業の指導案と教材を準備

※モデル校終了後も継続した取組を行うための課題を洗い出し、整備した。

<令和7年度からの取組>(令和7年度外部講師派遣事業に応募し予算を確保)

教員研修を実施の後、「がん教育から始まる『いのちの授業』」を年間指導計画に沿って実施する。

9月…保健：全校生対象の講演＋グループワーク

道徳：2年生対象の授業→「おとうさんにもらったやさしいうそ」

12月…道徳：1年生対象の授業 →「メディカルテット」を活用

1月…道徳：3年生対象の外部講師による授業→「いのちの授業－6枚のカード」

(4) 講演

「がん教育における外部講師の役割と連携」－学校との連携方法、講師としての配慮事項－
兵庫県がんピアサポーター 大西 亜矢 氏

・自己紹介

元教師であり、がん経験者でもある。29歳で卵巣がんが発覚し、手術2回と化学療法を経験した。その後は晩期合併症を隠しながら復職を実現。がん教育の講師の依頼はあったが本人や家族が患者である生徒への配慮等慎重に準備を進めていた。60歳の時、再度がんセンターで手術を受けたことで「時間がない」と痛感し、外部講師として活動を開始した。現在は、養護教諭や小中学校教員への研修会、中学・高校の授業の外部講師依頼を受けている。



・授業を行うまでの準備について

授業構成は、がんの基礎知識～休憩～体験者から、という構成で2回の治療経験を基に話をした。指導案とプロフィールを事前に通知し、教員と一緒に2か月以上かけて準備を行った。その中で生徒や保護者等の情報を可能な限り把握し、それを踏まえて講話における発言を検討した。

・「体験者から」の内容について

「誰でもなる病気、誰も悪くない」「医療技術は上がっているが…正しく恐れる」といったことは、経験者だからこそリアルに伝えられる。「生きている奇跡」「命は有限」「自分も周りの人も大切に」といった感情に訴える表現と、「できるだけ早期発見することの大切さ」「患者との接し方」といった情報を合わせて伝えるようにしている。逆に、治療の話でも怖いと感じる可能性のある内容、〇〇したから良かった・悪かったという発言、思想や宗教に関する内容は言わないように配慮している。また、学校の要望にも合わせて内容を考えている。

・最後に

がんは〇〇していたら、ならないなんてことはない。そういう意味で完全に予防することはできないが、心構えはできるということを生徒へ伝え、今日の命を大切にしてほしいと思っている。

そのためにも先生方と一緒に、今後もがん教育を実施していきたいと思う。

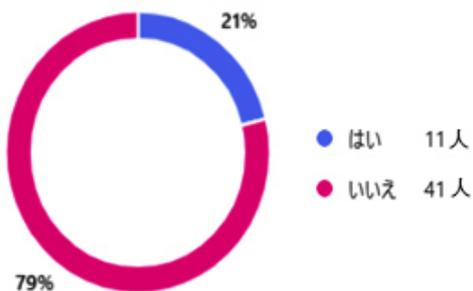
3.参加者の様子 ※事後アンケートより

<参加者属性、がん教育の現状、がん教育への意識>

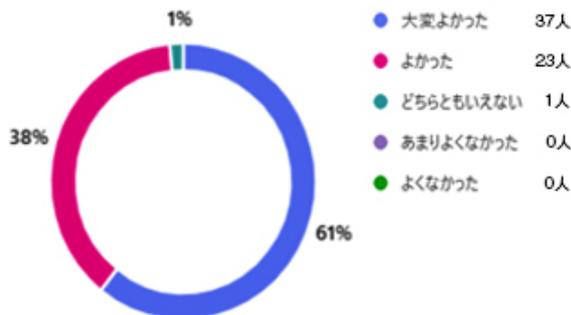
職種（職域）について選択してください



2. 保健の授業以外で「がん教育」を実施している



6. 今回の研修会についての感想を選択してください



研修会についての感想（抜粋）

No.	今回の研修会についての感想
1	校内でのコンセンサスの取り方や、配慮の仕方、実践の良かった点を知ることができた。今日学んだことを参考に今後、執務に励んでいきたい。
2	がん教育を行う重要性に気づくことができた。自分自身も間違った認識をしていたことに気づけて、今後も学んでいきたいと思えた。
3	命の大切さとして、生徒だけでなく職員も話を聞ける機会をつくってみたいと思った。
4	がん教育における授業実践や取組、近年の動向等を具体的に学ぶことができた。また、外部講師の先生方との配慮事項の共有等、児童生徒の心理面に対するサポートに必要なポイントについても学ぶことができた。
5	外部講師を呼んで講演会を予定している。その際に活用できる内容が多くあった。